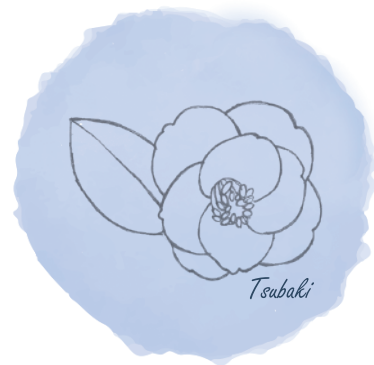


れきしみち

- 企画展「江戸の愉しみー安城の相撲・芝居ー」
- 松平シンポジウム 報告
- 連載「安城歴史散策 昔ものがたり」
- 博物館実習報告、
1～3月のイベント紹介、市民ギャラリーよりお知らせ

2019.1
No.111



Tsubaki



Mitsuba



安城の三河万歳



Human face earthenware

特集：企画展 江戸の愉しみー安城の相撲・芝居ー

写真左：歌川国貞画 勘進大相撲取組之図（本館蔵）写真中央：三代歌川豊国画 市川市蔵（本館蔵）



西三瓦祖 岩瀬善四郎碑



Chloraanthus



安城市
歴史博物館

Anjo city Museum of History

博物館実習報告

博物館実習生が常設展の展示替えを行いました



実習風景

平成30年度の博物館実習は8月上旬に6日間にわたって行い、7名の学生が実習を受けました。資料の取扱いや博物館業務に関する講義・実習を実施しましたが、その中でも博物館実習の要ともいえるのが常設展示室の展示替えです。

実習生たちは展示替えのために当館で選定した資料の解説パネル作成に取り組みました。資料1点につき250字程度と文字数の制限があり、必要な情報を入れるために四苦八苦しながら原稿を作成しました。

実習最終日に行った展示替えでは、今まで展示されていた資料を収納した後に、展示ケース内に掃除機をかけ、雑巾で水拭きをし、除菌用の布で壁や床を拭いて資料に悪影響を与える原因を取り除きました。その後、展示ケース全体のバランスを考えつつ資料を配置しました。午前中から行った作業は仮配置が済むと、学芸員たちの前で展示配置の意図、展示コーナーや資料の解説を行いました。学芸員からの質問に答えたり、意見を聞いた後に展示に修正を加え、今年度の実習は無事に終了しました。

歴史博物館1月～3月のイベント

(申込み・問合せ) 安城市歴史博物館 ☎0566-77-6655

安城歴博・中京大学連携講座 (参加費)無料

「三河・愛知の郷土食」

(日時) 1/12(土) 14:00～
(講師) 小早川道子氏(歴史文化学科准教授)
(定員) 80名
(申込) 当日受付

「新美南吉

『牛をつないだ椿の木』をめぐって」
(日時) 3/9(土) 14:00～
(講師) 酒井敏氏(日本文学学科教授)
(定員) 80名
(申込) 当日受付

体験講座

「姫きものを作ろう」

(日時) 2/16(土) 10:00～12:00
(講師) 榎原清美氏(古裂美術工房)
(定員) 20名(先着順)
(参加費) 1,500円
(申込) 1/22(火) 9:00～電話受付

「平安時代における 尾張・三河国司の和歌と文学」

(日時) 2/9(土) 14:00～
(講師) 勝亦志織氏(日本文学学科准教授)
(定員) 80名
(申込) 当日受付

歴博講座 (参加費)無料

「新発見!? 姫小川古墳 ー平成30年度の発掘調査成果ー」

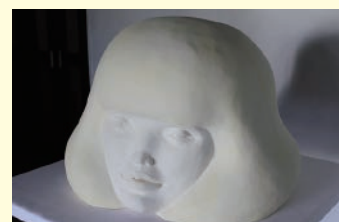
(日時) 2/2(土) 14:00～
(講師) 石原奈緒子(市埋蔵文化財センター)
(定員) 80名
(申込) 当日受付

「郷土食・箱ずしを作ってみよう」

(日時) 3/3(日) 10:00～12:00
(講師) 杉浦ひろ子氏(安城食・箱ずし保存会)
(定員) 20名(先着順)
(参加費) 500円
(申込) 2/15(金) 9:00～電話受付

安城市民ギャラリーよりお知らせ

企画展「素材と造形美の融合」



杉浦見奈子《月にまどろむ》

市民ギャラリーで収蔵する地元作家の作品や、市民ギャラリーの美術講座の講師による新作などを、素材に焦点を当てながら紹介します。

【開催期間】平成31年3月1日(金)～3月16日(土)
【時間】9:00～17:00(入館は16:30まで)
【休館日】3月4日、3月11日
【会場】市民ギャラリーD・E
【観覧料】無料

安祥文化のさと

「安祥文化のさと」とは安城市にある松平氏四代50年の居城跡を整備した安祥城址公園一帯の名称です

【全館共通事項】

住所 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地
休館日 / 毎週月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始(12/28-1/4)
URL / <https://ansyobunka.jp/>

安城市歴史博物館
開館時間 / AM9:00～PM5:00
TEL: 0566-77-6655 FAX: 0566-77-6600

安城市民ギャラリー
開館時間 / AM9:00～PM5:00
TEL: 0566-77-6853 FAX: 0566-77-4491

安城市埋蔵文化財センター
開館時間 / AM9:00～PM5:00
TEL: 0566-77-4490 FAX: 0566-77-4491

安祥公民館
開館時間 / AM9:00～PM9:00
TEL: 0566-77-5070 FAX: 0566-77-6062



江戸の愉しみ

平成31年

2月2日(土)～3月24日(日)

【観覧無料】

文責…田中里張

安城の相撲・芝居

大都市の二大娯楽

江戸時代、相撲と芝居は人々にとって、大きな娯楽でした。江戸、京、大坂をはじめとする大都市では、毎年決められた時期に興行が行われ、大いに賑わっていた様子を浮世絵など当時の出版物で知ることができます。

こうした大都市での興行は地方にも伝わり、祭礼などにおいて相撲や芝居が行われるようになりました。地域に伝えられた資料から安城市域でも、村人たちが祭礼の際に素人相撲や地芝居を行ったことが分かります。

今回の企画展では、江戸時代から明治期にかけて、市域の村々で行われた相撲・芝居に関する資料のほか、当館収蔵品の中から、江戸など大都市で行われた相撲・歌舞伎の隆盛を伝える出版物を展示します。

それでは、展示資料の一部を一足先にご紹介します。



歌川国貞画 勧進大相撲取組之図(本館蔵)



歌川国輝画 菊間 清見潟又市(本館蔵)

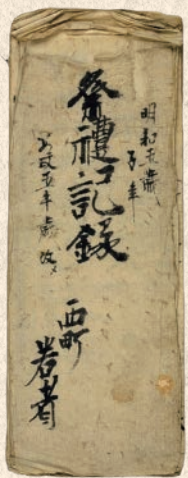
着けた衣装の形や色、模様、帯の結び方を多くの人が真似ねたため、多くの流行が生まれました。こうした相撲・芝居の人気ぶりは、数多くの浮世絵が出版されたことからもうかがえます。特に人気役者の肖像や舞台の姿を描いた芝居絵は、美人画・風景画とともに、江戸時代で最も多く制作されたテーマでした。

安城市域の相撲

江戸時代、江戸・大坂・京で行われた定期的な大規模興行以外の時期、力士たちの多くは地方を巡業していたようです。こうした地方巡業を契機に地方にも相撲が広まり、地域の祭礼などの余興で相撲が行われるようになったと考えられます。

●桜井神社の祭礼記録

桜井神社には、西町の若衆連が記した、江戸時代中期から明治期における桜井神社の祭礼記録が伝えられています。ここには、毎年行われる祭礼の次第とそれを行う村の当番や参加する村の順番が記されており、大祭礼(神楽や辻行灯(夜灯)の奉納、飾馬、花火、相撲についても記されています。これによると、安永三年(一七七四)に「鳥居前に相撲御座候所」とあり、桜井神社の相撲はこれ以前から行われていたことがわかります。また、桜井神社の相撲は、印内・中開道・下谷・城向・西町・東町・堀内村の七か村が順に当番で行っていたことが記されています。



西町若者祭礼記録(桜井神社蔵)

●東尾八幡社の奉納額

また、安城町の東尾八幡社には、「大関(勝者)となった「安城村住人」が奉納した額が残されています。安永五年(一七七六)から明治二年(一八六九)まで一〇点あり、そのうちの四点には、裏面に川野(河野)、西尾、藤井、桜井などの地名が書かれています。これらは、安城村の力自慢が他村の相撲に参加し、勝者となった大関(勝)ことを記念して奉納したと考えられます。



相撲奉納額(部分)(東尾八幡社蔵)

安城の芝居

江戸や大坂など大都市で発達した芝居もまた、芸人たちの巡業などにより地方に伝わったと考えられ、江戸時代後期には、各地の農村でも社寺の祭礼時に芝居が行われるようになります。この時には、旅興行の芸人たちを呼ぶこともあれば、村の百姓たちが役者となって芝居を演じることもありました。こうした村々の芝居は、明治期においても盛んに行われました。

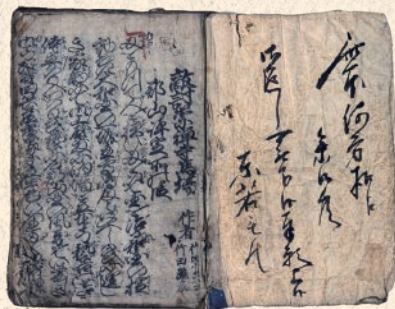
●東尾若者組の芝居台本

市域の村々でも芝居が行われていたようです。東尾町内会には、一・一五点もの歌舞伎の台

●村芝居の祝儀帳

柿碕町内会所蔵の「俳優花納帳(明治三十一年)」には、村人の名前と金額、役者の名前が書き上げられています。村人たちが各々目当ての役者に出した花代(祝儀)を記録と考えられます。ここに書き上げられた人名の傍らには安城西尾・東尾・北山崎・高棚・里のほか、上下佐々木・小針(岡崎市)、八橋(知立市)、花園(豊田市)などの村名が記されており、村の芝居に他村の人々が参加していたと考えられます。

この他にも、地元ゆかりの力士に関する資料や村芝居で舞台の背景として使用された襖絵や小道具など、様々な資料を展示します。



芝居台本「敵討崇神」(東尾町内会蔵)

●歴博福よせ雛

「日時」
2月2日(土)～3月24日(日)

「内容」

福よせ雛とは、持ち主の事情でやむをえず手放されてゆく雛人形たちがもう一度輝ける場を作ろうと始まりました。企画展にちなんだ風景を雛たちが再現します。

☎0566-7716655

●展示解説

「日時」

2月17日(日)、3月3日(日) 各日14時～

特別展開連行事

●歴博講座

「資料にみる」

安城市域の相撲・芝居」

「日時」3月16日(土)14時～

「講師」田中里張

(本館学芸員)

「定員」80名(先着順)

「申込」不要

●展示解説

「日時」

2月17日(日)、3月3日(日) 各日14時～



左:土人形 静御前 右:土人形 熊谷直実 (本館蔵)





はじめに

平成三十年十月七日の日曜日、歴史博物館エントランスホールにおいて、第9回松平シンポジウム「家康、天下にあい構える―秀吉との対決と臣従―」を開催しました。

タイトルは、秀吉が信濃上田の真田昌幸に送った天正十三年十一月十九日付の書状「羽柴秀吉書状（真田氏歴史館所蔵）にある「対天下家康表裏相構候儀条々有之」からとった言葉です。内容は家康の重臣石川数正が出奔し、秀吉のもとに奔った事件を、家康は天下（秀吉の自称）に嘘をついて企みをする人物で、家康の不徳が数正退出の原因である、として秀吉が非難したものです。

今回は、天正十二年四月の小牧・長久手の戦い前後から家康が秀吉に臣従する同十四年までの時期を対象に、家康・秀吉を中心としてその周辺の大名の動向を含めて検討しました。コーディネーター（司会）には國學院大學講師の平野明夫氏、パネリストには、播磨良紀氏（中京大学教授）、福原圭一氏（上越市公文書センター学芸員）、平井上総氏（花園大学准教授）を迎え、基調報告そして討論質問という形でシンポジウムが進められました。



平野明夫氏
國學院大學講師



福原報告

福原 圭一氏
上越市公文書センター
学芸員

「上杉景勝と家康・秀吉」と題して、上杉景勝（以下、景勝）領に関わる信濃をめぐる当該期の三者の関係について報告した。

織田信長死後、旧武田領国を巡って争った「天正壬午の乱」によって景勝と家康の分国が境を接するようになった。信濃海津城に居た景勝方の屋代氏と家康方の依田信蕃らが両者の仲介者であり、当時は友好関係にあった。

しかし、天正十二年（一五八四）に屋代氏が徳川方に出奔した。海津城を信濃支配の中心として位置づけようとしていた中での事件で衝撃は大きく、信濃の武士たちの動揺を抑えるため景勝自ら出馬して信濃の支配、仕置きをしなければならなくなった。この出奔は小牧・長久手の戦いに連動して起きたと考えられる。景勝はこの段階で家康と手切になり、関係は修復されることなくずっと敵対関係になる。

しかし、景勝は直接家康と対決することなく、信濃では小笠原貞慶、真田昌幸、越中では佐々成政らと対峙し、その背後に実は家康がいるという構図ができてくる。

この前後、天正十一年八月になると、初めて景勝は秀吉と関係を結ぶ。そこでは信濃と越中が問題になった。秀吉は「信州郡割」つまり信濃国

後、織田信孝側に対して入魂したいというような連絡をしたらしい。中国地方の毛利輝元らも柴田勝家側と連携を組んで秀吉包囲網を作ろうとする。しかし、天正十一年四月の賤ヶ岳の戦いで柴田勝家が負け、元親には同盟者がいなくなると、同年十一月ごろから秀吉に対して和睦交渉をはじめた。四国のうち阿波と讃岐という二か国を渡す代わりに、伊予を与えられるよう秀吉に要求したが断られたらしい。これは秀吉が毛利輝元に対して配慮したものと思われる。元親は秀吉と和睦を結ぼうとしたが上手くいかなかった。

そんな中で織田信雄（以下、信雄）が天正十二年三月六日に重臣三人を殺害して羽柴秀吉に對抗しようという動きを示す。その翌日付で、信雄は元親の弟の香宗我部親泰に対してその協力を求める書状を出している。

小牧・長久手の戦いの最中に元親は何か月にもわたり信雄や家康方と連絡を交わした。動きをまとめる、開戦直後に信雄・家康方から同盟を求めていること。そして信雄・家康が上洛する際に、秀吉の背後を攪乱するために元親の淡路出兵を当初提示し、小牧・長久手の戦い後は摂津とか播磨というように本州の方に渡るよう求め始めたこと。信雄としては長宗我部氏を下に見るという意識があり、書状が少し薄礼化してくること。信雄・家康には秀吉の軍勢を分散させるメリットがあり、元親にしても近隣領主との外交でアピールできるメリットがあること、である。

ただ、元親は淡路制圧どころか讃岐の三好存保が抵抗し、伊予方面では毛利方と争い始め、信雄・家康方の期待する動きはできなかった。結局、この同盟は自然消滅し、天正十二年十一月に信雄・家康は秀吉と和睦した。置いていかれた

元親は十二月頃和睦を求めるが秀吉に断られ、翌年、息子の信親を大坂に居住させて奉公させるといふ、降伏する形で受け入れられ、後に土佐一国を安堵された。

まとめとして、同盟でのメリットに関しては、軍事面での牽制・挟撃、外交面での宣伝であるが、挟撃に関しては元親勢が淡路に渡海できなかったので限定的というような評価になる。結果論だが、元親にこの同盟がもたらしたのは、秀吉からの脅威を軽減することができたことと、三好存保の拠点である十河城を攻略できたこと。ところが最終的に孤立して、毛利輝元と開戦し、それが結局秀吉に攻められるというところに繋がっていく。同盟が結果的に悪い影響を与えたという部分もあったのではないかと思われる。



播磨報告

播磨 良紀氏
中京大学教授

『小牧・長久手の戦い』後の徳川家康と豊臣秀吉」と題して、戦い後の秀吉・家康関係の解明について報告した。

豊臣政権の研究というのは戦後、太閤検地論争という大きな論争があったように、社会経済史が大変盛んになり、政治史は注視されてきた。ところが近年、政治史の分野でもかなり色々な研究が出てきている。秀吉文書が活字化されたことも大きい。

小牧・長久手の戦いは、以降の豊臣政権を左右する重要な戦いで、一般的には家康の智謀で秀吉に勝利した戦いとされる。しかし半年にわたった、尾張だけでなく、伊勢、南美濃での広域

を分割して、家康と景勝の国境を確定し、越中では佐々成政との間を確定しようとする。信濃の問題は深志にいた小笠原氏の存在で、景勝は家康の後ろ盾がある小笠原氏と筑摩郡の境目の麻績・千見（ちみ）を取合ひしていた。

景勝と秀吉はある意味対等な同盟関係を保っていた。天正十四年正月に小笠原氏といったん鉾を納めるよう秀吉は景勝に要請している。これは、この前年十一月に家康の家臣石川数正が、人質であった小笠原貞慶の子供を連れて秀吉の元に出奔したことに連動して、小笠原氏も家康方から秀吉方に移ったためである。ただ、景勝は秀吉の要請を受け入れているが、実際には境目の取合ひは続く。

信濃埴科方面では天正十一年に家康方の真田昌幸が海士淵、後の上田に築城しているのに追い払うよう景勝は命じている。景勝と真田氏とは敵対状態にあった。しかし、天正十三年七月に真田氏は景勝の配下に入った。つまり景勝としては真田・小笠原氏が間に入る形となり、家康の脅威が消滅した。

景勝は天正十四年四月、ついに上洛をして秀吉に臣従する決意をした。この時大きな問題として、天正十年以来続く越後北部の新発田重家との抗争、そして小笠原氏との国境のことがあった。秀吉から昨年の越中佐々攻めに参加しなかったことを挙げられ、小笠原氏の押領を黙認するよう強要された。

秀吉と敵対関係だった家康がやっと上洛をして秀吉に臣従するということが決まった。

大戦争であった。

天正十年六月二日の本能寺の変後、六月後半に織田家の宿老が集まって清須会議が行われた。その結果、三法師を当主として四宿老で織田家を立て、織田信雄・信孝は後見人という体制をとる。しかし、十月に信雄・信孝が対立し、天正十一年に賤ヶ岳の戦いを中心とする戦争が起った。戦い後、信雄は織田家の当主となり、秀吉は信雄を支える宿老となり、朝廷からは秀吉へ太刀と勲功が与えられた。信雄には与えられていない。秀吉は四月か五月に上洛をし、太刀などの礼に朝廷に行くが、その時の秀吉上洛を公家が書いた日記には、まるで信長の時のようだという表現をしている。つまり、一方では今までの天下人であった織田家を引き継ぐ信雄と、もう一方では朝廷権威から認められた秀吉という存在が出てくる。

信雄はその後、本来ならばそのまま上洛という形で安土に在るべきであったが、尾張に戻って地域支配を展開する。その間に秀吉は織田旧臣たちを多く味方にして、天正十二年の三月から、小牧・長久手の戦いが起きる。

秀吉は上洛することによって官位官職を貰い、天下統一をしていくための後ろ楯として朝廷を利用していく。この戦いで信雄と、援護する家康らは戦いに勝って京都に上り朝廷と結ぶことで、自分達の政治の正当性を求めているのではない。

和睦をする直前にも秀吉は従三位権大納言と信雄よりも上の官位官職になり、上位の姿勢を見せる。そして和睦交渉が行われるが、明らかに秀吉の勝利であった。和睦条件は信雄領の伊勢半国を秀吉に譲る、そして母子などを人質として差し出すこと。家康に対しても、息子於義伊、岡崎城代石川数正の人質の差出を要求した。

その家康に小笠原氏は与力大名として付けられたことで、信濃内の国境が確定した。越中は佐々成政が討伐されたことによって国境が確定する。これにより景勝領国の西側の国境はほぼ確定した。残るは新発田氏で、天正十六年まで争いが続く。景勝が新発田氏を攻め滅ぼす時には小笠原氏から援軍が来ているようである。おそらく秀吉の命令によるもので、景勝はついに国境が確定し、越後を治めることができたのである。



平井報告

平井 上総氏
花園大学准教授

「長宗我部氏と家康・秀吉との関係について」と題して、小牧・長久手の戦いの影響、長宗我部氏がなぜ織田・徳川氏と同盟をしたのか、その意義について報告した。

まず、長宗我部と織田信長との関係だが、織田信長が京都を支配し、中央で政権を確立した頃に、土佐の国主になった長宗我部元親（以下、元親）は、信長に接近した。天正六年に元親の息子の信親に信長の信の字を貰い、織田政権に従っていた。その頃の元親は、織田家臣だった明智光秀や秀吉と連絡を取り合っていた。その後、信長は元親に阿波と讃岐を差し出すよう要求、織田家臣の丹羽長秀らを四国に派遣して元親を攻めさせようとするが、本能寺の変により中止となった。

本能寺の変の後、秀吉は元親のライバルである阿波の三好存保と結び、対立関係になった。その

秀吉側にはそういうのは一切無い。
その後家康は佐々成政との関係が疑われ、秀吉からさらに人質を出せと命じられる。この要求に対して家康は中々応じなかった。この時、秀吉は紀州攻め、そして四国攻めをし、関白に任じられた。天正十三年十一月に石川数正が出奔し、翌年正月には、秀吉は三河攻めを明言する。家康はそれに対して、東部城・岡崎城などの普請をして、対秀吉の動きをみせる。信雄は家康を説得し、秀吉の妹の朝日を家康に輿入れすることが決まった。跡部信氏の研究では、対真田の戦争があり、秀吉が家康方に味方して助力したことで家康は臣従したというように考えている。

そして五、六月頃に家康は秀吉から三位中将参議の官位官職を貰っている。秀吉は朝廷の権威に基づいて自分の天下統一を正当化した、その論理の中に臣従することによって家康もそこに組み入れられる。官位官職を貰い、家康は家臣団統制をしていく。

後に官位的には家康はナンバー2になる。その後関白秀次が誕生するが、やはり家康は一族以外ではトップである。豊臣政権での家康の役割というのは、まさに豊臣政権の中で「関東惣無事」という役割を持って東国支配、東国戦争の中で非常に重要な役割、それも忠実に果たしている。「秀次事件」等が起こる前後から、跡部氏よれば二大老制、「秀次事件」が起こっても東国が家康、西国は毛利というような形で、豊臣政権は運営されていく、とする。秀吉が死ぬと、豊臣政権の官職で家康がトップなので、そこに政権が作られ、江戸幕府になるというのは必然的な流れではないか。

三者の基調報告後、コーディネーターの平野氏より、この時期の家康を上杉、長宗我部、秀吉の立場からみて、またその逆はどうだったかについて質問されました。

家康からみた上杉について福原氏は、天正壬午の乱では、上杉氏は北条氏に匹敵する大きな大名としてとらえていた。天正十年十月に家康と北条が和睦、同盟し、大きな脅威が解消するに及んで、上杉との友好的な関係は特に求める必要がなく、間接的な対立となったのでは、とされました。

家康からみた長宗我部ということに関して平井氏は、おそらく小牧・長久手の戦いまでは、ほとんど接触が無かったと考えられ、四月三十日付の本多正信より香宗我部親泰に送った書状は初めての音信であった。長久手の戦いの時、おそらく信雄が最初に交渉を始めて、家康は信雄と一緒に長宗我部氏と交渉するようになったが、なかなか長宗我部氏が淡路に出兵しないので、もどかしい思いをし、結局自然消滅した、とされました。

家康からみた秀吉について播磨氏は、家康は信長の時から、関東を任せられるという存在で、本能寺の変後もその形態が続く。信雄が当主となっても、織田家の当主として家康はそれに従うという姿勢で、関東を任せられる。一方、秀吉からすれば家康と対立しているようにみえるが、これは惣無事論争でもあるように、天正十一年の時でもやはり織田家としてその関東を任せるように、家康に秀吉は言っている。それから天正十二年の直前、小牧・長久手の戦い前でも、初花の壺を贈り、敵対関係

ではない。しかし、小牧・長久手の戦いが織田家の当主信雄と秀吉が戦うということで、織田家の当主信雄と組んで戦うというようになった。ただ注意すべきは、信雄が上洛を絶えず口にしているが、家康自身は独自での上洛ではなく、信雄と一緒に上洛をするとしている。一貫して織田家を援助する姿勢でいる。この動きをみると家康は非常に誠実な動きをしている。織田家としても、豊臣大名としても、非常にきちっと役割をしている。家康はその時の政治情勢に合わせて誠実に動いていたのではないかと、とされました。

質問としては、小田原の役後の信雄の国替え拒否について、家康・秀吉対立時の三河本願寺教団赦免や水軍との関わり、石川数正の出奔理由について、当該期の家康家臣団の変化について、秀吉と上杉との連携について、上杉の領国について、岡崎城・東部城普請は天正十三年の大地震修復のためではないのか等々、がありました。特に多かったのは、本シンポジウムでは今回初めて関係を持つ長宗我部氏について、長宗我部氏の本能寺の変の直後から賤ヶ岳の戦い後の秀吉との交渉とその失敗後について、毛利との関係について、関ヶ原合戦後の改易について、などの質問がありました。そのうち、毛利との関係について平井氏は、毛利輝元に対して、元親から連絡をとってくれということを、信雄側では言っている、ので、毛利を抱きこむつもりはあったと思われる。またそれは信雄が毛利との直接のルートを作ってこなかったということ。結局この三月の段階で、毛利はすでに秀吉側にについていたので失敗に終わっただろう、とされました。

コメントとして山田邦明氏(愛知大学教授)

は、今回の報告が小牧・長久手の戦い後の展開を、広い立場で見えていて非常に面白いと評価されました。また、戦い後に信雄が秀吉に臣従したにもかかわらず、家康は上洛せずに息子子義伊を養子に出した段階を謎とし、秀吉との交渉で、天正十二年の冬に何が起きたのか今後の課題となること。そして大名間の同盟を考える場合、友好関係、起請文取り交わしなど様々な段階があり、この養子差出しは重要な珍しいケースで、とにかく戦争を止めよう、という協定だったのではないかと。そして、秀吉が追加の人質を要求したのは、一種の臣従要求に近いところがあって、それを家康が拒否したというストーリーとして説明できるのでは、とされました。

これについて播磨氏は、於義伊の差出しは臣従ではないとし、また、秀吉母の太政所所岡崎派遣という秀吉の対応は、単純に臣従と言っているのか、とされました。

同じく平井氏は、同盟の度合いから、信雄・家康陣営の上洛志向は秀吉の上方支配状況の打破を象徴している程度としか考えていない、当該期の信雄・家康と長宗我部氏との同盟交渉の経過を再考する必要がある、とされました。

最後に山本浩樹氏(龍谷大学教授)は、小牧・長久手の戦い時に木曾川沿いでの信雄と秀吉方との戦いでは援軍に消極的で、小牧城程度までとしていた家康が上洛を考えていたのか疑問とし、今後、研究の積み重ねにより明らかになることを期待する、とまとめられました。来年度のシンポジウムは本館改修工事のため実施いたしません。しかし再来年には、記念となる第10回のシンポジウムを行いたいと考えています。ご期待ください。



矢作川流域の瓦生産

矢作川流域には、奈良時代から平安時代のころ北野廃寺、別郷廃寺、寺領廃寺があり古瓦が出土しています。また、豊川流域にも古代寺院の跡があり、やはりいくつかの古瓦が出土しています。三州瓦が単に三河で作られた瓦という意味でなら、古代から三州瓦はあったこととなります。しかし、三州瓦という呼称は、それなりの専門的な技術を持つ職人が存在し、相当量の生産・集荷・出荷・販売が組織的・系統的に展開されていなければ、「三州瓦」というブランドにはなりません。技術面からみても瓦をむらなく同じ色にすることでさえ、焼き上げをコントロールできる専門の職人と窯を抱えていないとできないことです。

る桃山時代にも至ってもいません。瓦の需要が継続的でなくては経営が成り立ちません。寛正年間(一四六一〜六六)に営業活動をしていったというのは確かに信じがたいところです。また、桃山時代以前の作り方である布引瓦が岩瀬家付近で出土していないこと、瓦窯の跡も見つかっていないことから当時の瓦生産販売地があったと考えることはできません。

江戸時代の初期、幕府の開府で大都市化した江戸で、大名屋敷の建設や大寺院の建立などで瓦使用が多くなりました。その後、八代将軍徳川吉宗の将軍時代(一七一六〜四五)には、それまで禁止されていた民家や商家の瓦葺き禁止令が解かれ、恩借金制度(今でいう補助金)が適用され瓦葺きが奨励されました。江戸時代は火事の延焼を防ぐために火元を壊したり隣家をつぶしたりして消火をしていました。そのため瓦の使用は消火に邪魔であると考えられ使用が禁止されましたが、目安箱に瓦が防火に良いことを再三訴える者があり、幕府も江戸市中での火事の多さに苦慮していたことから、その利を認めこの禁止策を解除しました。これによって瓦の需要を高め生産を増加させました。瓦も本瓦葺きから便利で安価な棧瓦葺きが発明されたことも民家や商家への瓦葺きの普及を早めました。



西三瓦祖 岩瀬善四郎碑